第3章　都市（まち）づくりの目標

将来の白河市の目指す姿や、その実現のために取り組む今後の都市づくりの基本理念について整理します。

第3章　都市（まち）づくりの目標

1．都市づくりの目標

(1)都市づくりの出発点

自分たちの生まれ育った地域のことを「ふるさと」といいます。また、多くの人と関わりあいながら生活している地域が「ふるさと」ともいえます。都市づくりの出発点は、自分が住んでいる地域や都市全体の魅力と問題点を再確認することから始まります。つまり、「ふるさと」について、自分の知っていることや、今まで気付かなかったことを丁寧に点検することによって、美しい景観、歴史的な事実、日常の小さな困りごとなどを再認識し、それらを活かしよりよいものにする都市づくりに取組むことが重要となります。

このように、都市づくりを進めるためには、「ふるさと」について様々なことを学び、知ることが必要です。

そこで、本市の都市づくりの出発点を次のように定めます。

都市づくりの出発点

ふるさとを知るということ

(2)都市づくりの方向

これまでの都市づくりは、人口が増加し、経済が発展する社会を前提とした「拡大型の都市づくり」を進めてきました。しかしながら、これからの「人口が減少する社会（人口減少社会）」や、「子どもが少なくなりお年寄りが増える社会（少子高齢化社会）」では、「身近な暮らし」を大切にし、利便性のみを求めるのではなく、身（み）の丈（たけ）にあった都市づくりが必要となってきます。

一方で、都市づくりの出発点である「ふるさとを知るということ」を実行しようとすれば、人とのふれあいの中から学ぶことが多くなります。かつては人間関係が、今よりも密であり、コミュニティによって、「ふるさとを知り、守ること」がごく一般的に行われていました。

身（み）の丈（たけ）にあった都市づくりとは、「ふるさとを知り、守ること」を様々な人々が取り組むことにより、息の長い都市づくりを実現することです。したがって、都市のあらゆる地域で、あらゆる場面で、のびのびと気持ちよく暮らせるための整備や仕組みづくりを、歴史的な時間の流れを意識しながら、市民協働で進めていくことがとても重要です。

本市では、「ふるさとを知るということ」という出発点から、利便性の重要さを認識しながらも、人と人との交流を中心とした身（み）の丈（たけ）にあった都市づくりに向けて、温（ぬく）もりあるコミュニティがいくつも存在する、様々な交流を折り重ねていく生活密度の高い（コンパクトな）都市づくりを基本的な方向とします。

(3)将来都市像

都市づくりの出発点は、「ふるさとを知る」ということから始まります。

ふるさと白河に住んでいるみんなが、「四季に彩られる美しい景観都市 白河」を、「400年来の歴史空間都市 白河」をあらためて認識し、そのような愛着と誇りがもてる都市を舞台に、温(ぬく)もりのある交流に根ざした、生活密度の高い都市づくりを進めていきます。

都市は市民の様々な交流によって支えられています。古い歴史を持つ白河は、地域の交流、都市との交流を創造してきた都市でした。そのように創造してきた交流を大切にし、人と人との交流、世代間の交流、コミュニティの交流、都市と田園の交流、ハンディキャップを越えた交流、モノの交流、都市の交流など、先の世代から引き継いだ交流を温めるとともに、新たな交流を創造していく都市を目標とします。

そこで、白河市都市計画マスタープランの将来都市像を次のように定めます。

将来都市像

交流創造都市　ふるさと白河

― Regional creative city ―

古くから交流を創造してきた都市　ふるさと白河
新たな交流を創造していく都市　ふるさと白河

2. 都市(まち)づくりの基本方針

将来都市像「交流創造都市 ふるさと白河」を目指して、生活密度が高いまちの基本方針を次のように定めます。

(1)城下町の都市構造を活かしたにぎわいのあるまち

400 年前の町割りに始まる白河市の市街地は、城下町の都市構造を活かしながら発展してきたため、今も大きく拡散することなく、生活に見合う規模となっています。したがって、先の時代から引き継いできたこの市街地を大切にし、町屋の敷地を活かした歴史と風情あるまちなか居住の提案、人の顔が見える商店を大切にした中心市街地の再生、地域の温(ぬく)もりのある交流等により、にぎわいのあるまちを目指します。

(2)密な公共交通等による生活利便性の高いまち

これまでは、自家用車主体のライフスタイルで生活の利便性を高めてきましたが、運転のできない高齢者が増加して利便性を維持できないことや、地球環境を悪くすることが課題となっています。したがって、これからは、安全で安心な歩行空間の整備などにより、城下町に歩く楽しみを取り戻すとともに、市街地内にすでに整備された公共交通機関を有効活用します。また、市民にとって使い勝手の良い新たな公共交通のあり方を検討し、スムーズに交流が実現出来る都市を目指します。

(3)まちと緑が共生した環境に優しいまち

本市の市街地は大きく拡散することなく形成されており、これからは人口が少なくなっていくことを考慮すると、無秩序に市街地を拡大することは避けなければならないことです。したがって、城下町を核としたコンパクトな市街地を中心として、市街地は必要以上に拡大せず、周辺の川と里山に抱かれた田園地域を守る、まちと緑が共生した都市づくりを目指します。また一方では、活力ある都市活動を支えるために、適切な計画をもって地域特性に応じた土地利用を計画的に誘導します。

(4)連続の美と空間の美のメリハリによる美しいまち

本市の景観は、「白河関跡」「小峰城跡」「南湖公園」などの歴史的・文化的景観資源と、那須連峰や、そこを源とする河川、自然丘陵、田園風景などの自然的景観資源の両方が魅力となっています。したがって、城下町のおもかげを残した中心市街地では、趣(おもむき)のある建築物による連続の美を追求し、自然的景観では、空間の美を追究する、メリハリのある景観づくりを目指します。また、そのようなメリハリのある都市景観の中で、住んでいる人が心地よいと思える、地域の個性が息づくまちなみ景観の実現を目指します。

(5) 人とのふれあいから「ふるさと」を意識するまち

かつては、人と人が顔をあわせて商売が行われていたり、井戸やテレビ、電話を共有したりして、隣近所をはじめとしたお付き合いの中で、助け合い、協力し合いながら生活していました。そこには、ふるさとで大切にしなければならないものの共通認識があり、様々な交流があったのです。しかしながら現在は、技術や流通の発展により、人と人とのつながりが弱まり、共通認識だったふるさとの大切なものまで見失おうとしています。したがって、現在の利便性を維持しながら、ふるさとを身近な人とのふれあいから知り、人間関係が密で温(ぬく)もりあるコミュニティのあるまちを目指していきます。また、年齢や性別、身体的能力の違いを越えて、人を思いやる気持ちをかたちにしたユニバーサルデザインの都市づくりをあらゆる場で進めていきます。

3. 将来都市構造

(1) 中心地域のゾーン

本市の中心地域の将来都市構造を次のとおり定めます。

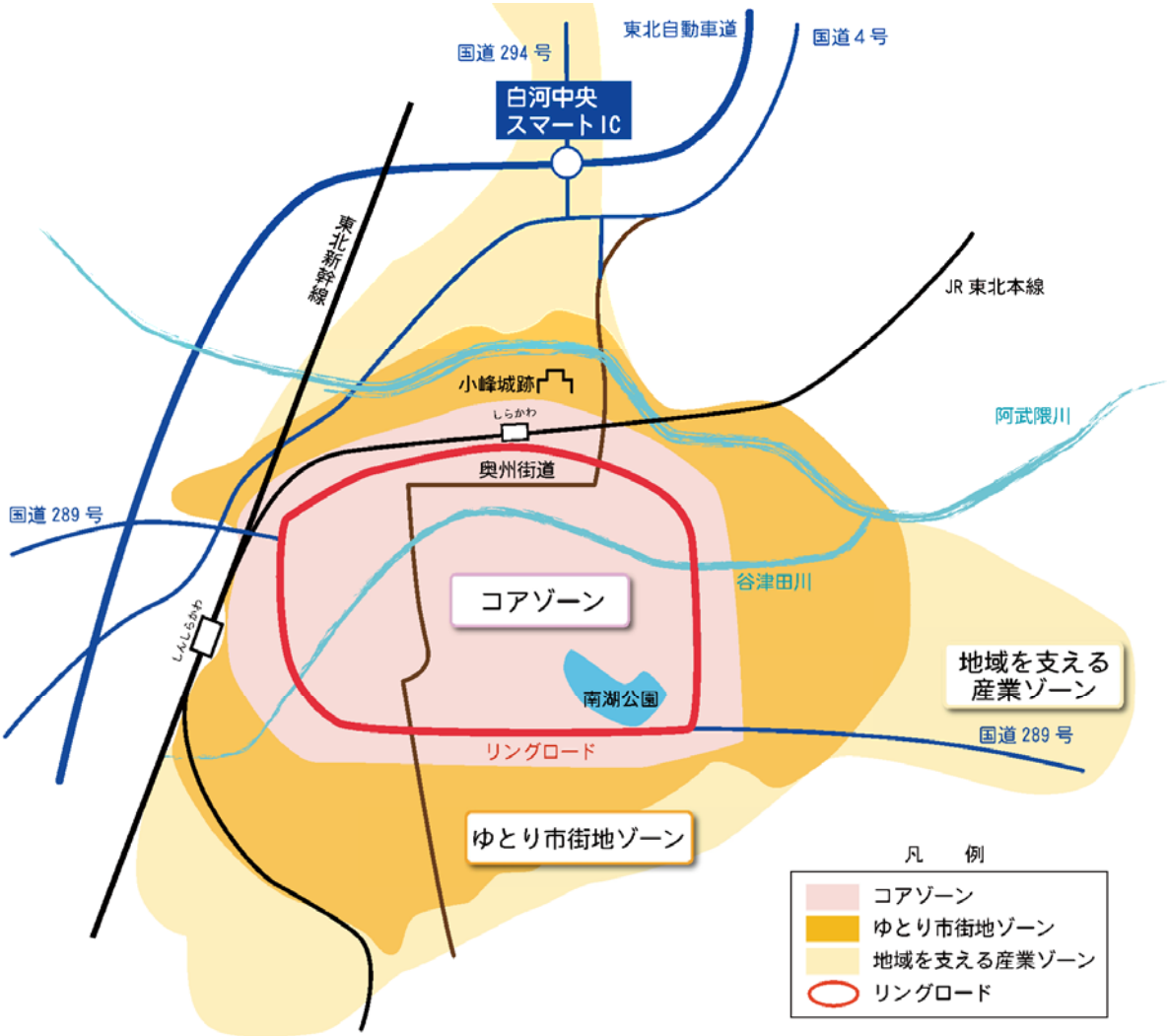

図 3-1　将来都市構造図（コアゾーン周辺）

①コアゾーン

本市の小峰城跡・白河駅～南湖公園～新白河駅を囲む地域を、白河市の歴史と文化を伝えるとともに、人と人との交流の中心となる「コアゾーン」と位置づけます。

コアゾーンは、歴史ある都市骨格の活用を図る小峰城跡・白河駅地区、市民の誰もが楽しめる南湖公園地区、市民の商業ニーズを支える新白河駅地区の大きく 3 つに分けることができます。これらの 3 地区が連携し、スムーズな都市活動を支える都市基盤の整備を進めます。

また、コミュニティの交流・連携機能を高め、歴史・文化・生活の拠点として、ふるさとの魅力が十分に発揮できる都市空間の創造を目指します。

②ゆとり市街地ゾーン

コアゾーンを取り囲む郊外型住宅地を中心とした一帯を「ゆとり市街地ゾーン」と位置づけます。本ゾーンにおいては、低層住宅を中心とするゆとりある都市環境の形成を図るとともに、自主的なルールづくりなどによる住みよいまちを目指します。

普段の生活から、家族内での交流、隣近所との交流、地域での交流を深め、温（ぬく）もりが感じられるコミュニティを創出します。また、自家用車への依存を少しでも軽減するため、市民にとって使い勝手の良い公共交通網の充実を検討します。

③地域を支える産業ゾーン

ゆとり市街地ゾーンを取り囲み、工業団地等を含む一帯を「地域を支える産業ゾーン」と位置づけます。地域の活力は、地域の経済活動がエンジンとなり生み出されています。その活力が都市活動を支えて、次の世代へと都市づくりが受け継がれていきます。本ゾーンにおいては、優良企業の誘致等による産業の振興を図り、地域の活力の基礎となる働く場の創出を計画的に進めます。

④リングロード（地域交流の輪）

コアゾーンの内側に位置する環状道路（都市計画道路白河駅棚倉線・都市計画道路白河駅八竜神線）を、歴史的な都市空間が体験でき、都市機能の役割分担や市民の生活・文化のつながりを確認・発見する輪として、白河市における交流の回転軸「リングロード」と位置づけます。リングロードは、市民同士や市民と来訪者をつなげる輪であり、都市機能、歴史、文化、商業、地域コミュニティなどの様々な交流の局面で機能を発揮します。

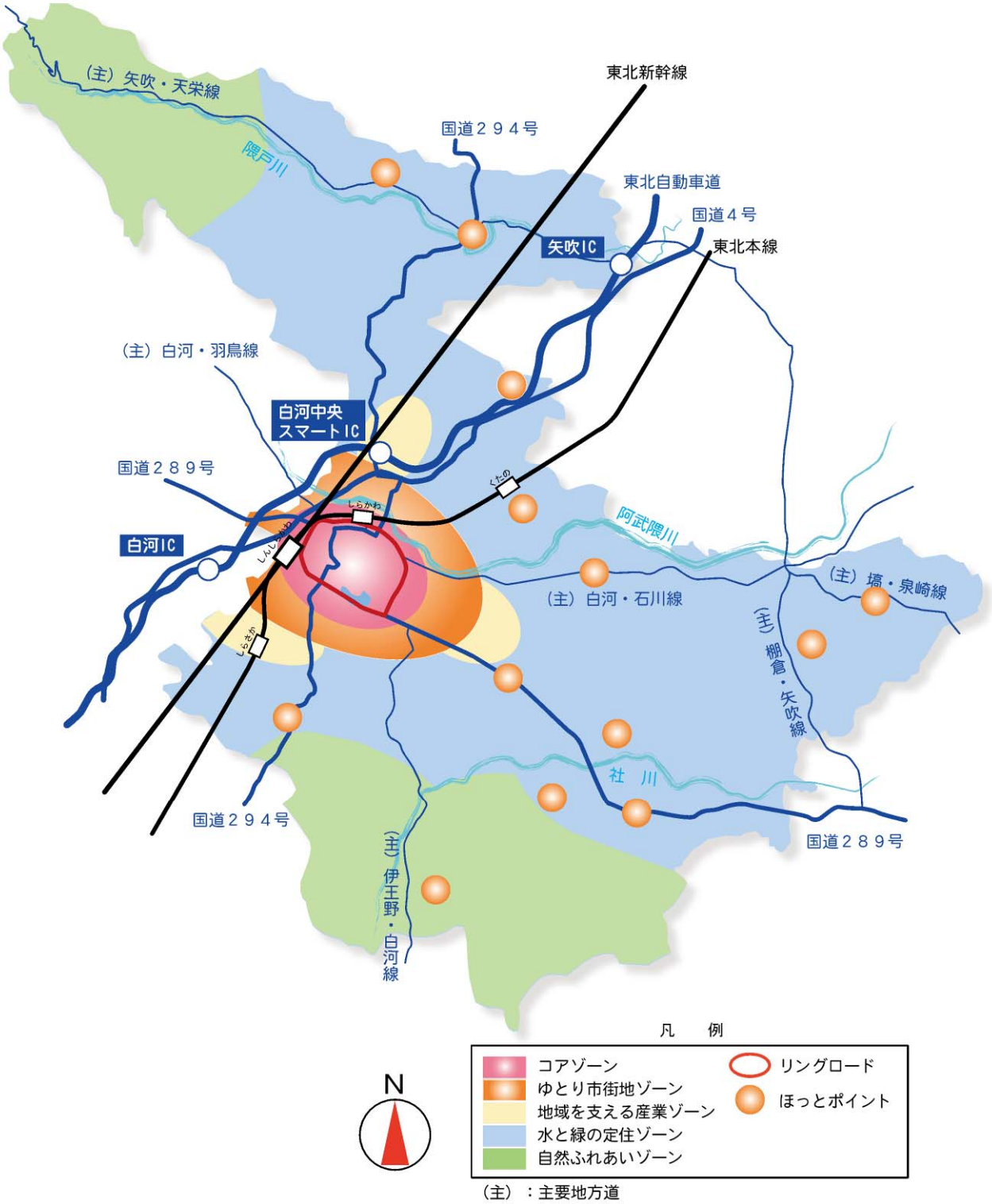

図 3-2　将来都市構造図（市全域）

（2）周辺地域のゾーン

①水と緑の定住ゾーン

阿武隈川、社川、隈戸川などの源流域の豊かな自然の中に広がる集落や田園を「水と緑の定住ゾーン」と位置づけます。本ゾーンにおいては、コミュニティ交流拠点を中心として、地域文化やコミュニティ機能の向上に努めるとともに、優良農地の積極的な保全と美しい水や豊かな里山の活用を図ります。

②自然ふれあいゾーン

本市の北部と南部に広がる森林、丘陵地域を「自然ふれあいゾーン」と位置づけます。本ゾーンにおいては、森林の水を蓄える役割、二酸化炭素を削減する役割、文化を生み出す風土としての美しい景観などの様々な役割に着目し、これらを癒しの空間や自然の大切さを実感できる空間として有効に活用していきます。

③ほっとポイント（コミュニティ交流拠点）

水と緑の定住ゾーンにおけるコミュニティ交流拠点を「ほっとポイント」と位置づけます。ここは、美しく心安らぐ田園風景や水と緑の豊かな自然環境など、ゆったりとした暮らしの中での利便性を提供し、コミュニティの中心となるところです。また、市街地と田園とのホットな交流を深めるポイントでもあり、地域のコミュニティの中でほっとする場所でもあります。

④リングロード（都市交流の輪）

リングロードは、地域交流の輪であると同時に、都市交流の輪でもあります。

リングロードは、すでに整備されている東北自動車道や東北新幹線を中心とする広域高速交通網、古くからの広域交流の中心である国道４号、甲子道路の全面開通により南会津地方との新たな交流が期待できる国道 289 号、白河中央スマートＩＣの設置や広域病院の移転等により都市として重要な機能を担（にな）う国道 294 号、そして東北本線、主要地方道や県道などを有機的につなぐ輪として位置づけ、都市間交流を拡げていく要（かなめ）とします。